

## 第 63 回 SGRA フォーラム概要

### 第 4 回「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性」円卓会議

# 『東アジア』の誕生－19 世紀における国際秩序の転換－

日 時：2020 年 1 月 8 日（水）～12 日（日）

会 場：フィリピン・アラバン市ベルビューホテル、フィリピン大学ロスバニョス校

主 催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

共 催：科学研究費新領域研究「和解学の創成」、早稲田大学東アジア国際関係研究所、  
フィリピン大学ロスバニョス校

#### ■フォーラムの趣旨：

19 世紀以前の東アジアは、域内各国の関係は比較的疎遠で、各国が個別に外国との関係を結んでいた。しかし、西洋の諸国がグローバル化の運動を北太平洋まで及ぼしたとき、日中韓の関係は政治・経済・通信のいずれの面でも緊密化し始め、その中で「東アジア」を一体のリージョンと見なす想像力が生れた。今回は、このような東アジアの国際秩序の変化、その中で各国の国内秩序の変化を主題に国際対話を試みる。

西洋が強い商業関心と新たな交通・通信・軍事技術をもって該地域に再登場したとき、中国・日本・朝鮮はどのように西洋を認識したか。伝統的な知の体系とそれはどう絡み合ったのか。いずれの国でも反発と同時に新たな知への憧憬が生れ、一方では伝統への挑戦、他方では伝統の再造が試みられた。例えば、日本では、洋学が学校教育の軸に据えられる一方、秩序の核心に天皇を置き、家族では儒教的な男性優位観が一般化した。この西洋への反発と憧れは国ごとに組み合わせ方が異なり、それは今に至る文化の相違を生み出すことになった。

西洋の進出は各国に自衛を促し、結果的に各国を「国民国家」に変えていった。遅速の差はあっても、国境を明確化し、内部の団結を促すナショナリズムを生み出すことになったのである。その一方、西洋の持込んだ海運網は、人々を国境の外に誘うことにもなった。中国からは東南アジアに加えてアメリカ大陸に大量の出稼ぎ労働者が向い、以前は皆無だった日本からも移民が海を越えるようになった。朝鮮では移民は少なかったが、外国留学生や政治亡命者が現れ、やがて国の将来に大きな影響を及ぼすようになった。ナショナリズムの形成と国境を越える移民・留学・亡命との交錯は、従来の東アジアの秩序を国際関係と国内秩序の両面で大きく変化させ、20 世紀の大変動を準備することになる。

今回のフォーラムでは、およそ以上のような問題群を取上げ、3 つのセッションに分けて各国の事情を比較し、討論して、19 世紀東アジア世界に起きた大転換の全体像を把握したい。

なお、円滑な対話を進めるため、日本語⇄中国語、日本語⇄韓国語、中国語⇄韓国語の同時通訳をつける。円卓会議の講演録は、SGRA レポートして 3 カ国語で発行し SGRA ホームページに掲載する。

■プログラム

第1セッション：開会 司会：李恩民（桜美林大学）				
開会挨拶	Cho Kwang	趙 琬	韓国国史編纂委員会	
歓迎挨拶	Maquito Ferdinand	F. マキト	フィリピン大学ロスバニヨス校	19世紀のフィリピン
基調講演	Mitani Hiroshi	三谷 博	跡見学園女子大学	「アジア」の発明
コメント	Song Zhiyong	宋 志勇	南開大学	
第2セッション：西洋の認識 司会：南基正（ソウル大学）				
日本	大久保健晴	Okubo Takeharu	慶應義塾大学	19世紀東アジアの国際秩序と「万国公法」 受容—日本の場合—
韓国	韓 承勳	Han Seunghoon	高麗大学	19世紀後半、東アジア3国の不平等条約克服 の可能性と限界
中国	孫 青	Sun Qing	復旦大学	魔灯鏡影：18世紀から20世紀にかけての中国 のマジックランタンの放映と製作と伝播
中国	呉 義雄	Wu Yixiong	中山大學	「華夏と夷狄」から「中国と西洋」へ： 19世紀前期における中国の西洋に関する論 述パラダイムと情報戦略
第3セッション：伝統への挑戦と創造 司会：村和明（東京大学）				
日本	大川 真	Okawa Makoto	中央大学	18・19世紀における女性天皇・女系天皇論
韓国	南 基玄	Nam KiHyun	成均館大学	日本民法の形成と植民地朝鮮での適用：題令 第7号<朝鮮民司令>を中心に
中国	郭 衛東	Guo Weidong	北京大学	伝統と制度の創造：19世紀後期の中国の洋務 運動
第4セッション：国境を越えた人の移動 司会：彭浩（大阪市立大学）				
日本	塩出 浩之	Shiode Hiroyuki	京都大学	東アジア公共圏の誕生：19世紀後半の東アジ アにおける英語新聞・中国語新聞・日本語新 聞
韓国	韓 成敏	Han Sungmin	大田大学	金玉均の亡命に対する日本社会の認識と対応
中国	秦 方	Qin Fang	首都師範大学	近代中国女性のモビリティ—経験と女性「解 放」に関する再思考
2020年1月10日（金）				
第5セッション（14：00—15：30）：全体討議 司会：劉傑（早稲田大学）				
青山 治世（亜細亜大学）、平山 昇（九州産業大学）、朴 漢珉（東国大学）、孫 衛国（南開大学）				
第6セッション（16：00—17：30）：全体討議 司会：劉傑（早稲田大学）				
自由討論				
総括 三谷 博（跡見学園女子大学）				

□フォーラムの資料は下記リンクよりご覧いただけます。

<http://www.aisf.or.jp/sgra/research/kokushi/2019/12468/>

#### ■フォーラムの経緯：

渥美国際交流財団は2015年7月に第49回SGRA(関口グローバル研究会)フォーラムを開催し、「東アジアの公共財」及び「東アジア市民社会」の可能性について議論した。そのなかで、先ず東アジアに「知の共有空間」あるいは「知のプラットフォーム」を構築し、そこから和解につながる智恵を東アジアに供給することの意義を確認した。

このプラットフォームに「国史たちの対話」のコーナーを設置したのは2016年9月のアジア未来会議の機会に開催された第1回「国史たちの対話」であった。いままで3カ国の研究者の間ではさまざまな対話が行われてきたが、各国の歴史認識を左右する「国史研究者」同士の対話はまだ深められていない、という意識から、先ず東アジアにおける歴史対話を可能にする条件を探った。具体的には、三谷博先生（東京大学名誉教授）、葛兆光先生（復旦大学教授）、趙珣先生（高麗大学名誉教授）の講演により、3カ国のそれぞれの「国史」の中でアジアの出来事がどのように扱われているかを検討した。

第2回対話は、自国史と国際関係をより構造的に理解するために、「蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」というテーマを設定した。2017年8月北九州にて、日本・中国・韓国・モンゴルから11名の国史研究者が集まり、各国の国史の視点からの研究発表の後、東アジアの歴史という視点から、朝貢冊封の問題、モンゴル史と中国史の問題、資料の扱い方等について活発な議論が行われた。この会議の諸発表は、東アジア全体の動きに注目すると、国際関係だけでなく、個別の国と社会をより深く理解する手掛りも示すことを明らかにした。

第3回対話はさらに時代を下げて「17世紀東アジアの国際関係」と設定した。2018年8月ソウルに日本・中国・韓国から9名の国史研究者が集まり、日本の豊臣秀吉と満洲のホンタイジによる各2度の朝鮮侵攻と、その背景にある銀貿易を主軸とする緊密な経済関係、戦乱の後の安定について検討した。また、3回の国史対話を振り返って次に繋げるため、早稲田大学主催による「和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証」のパネルディスカッションが開催された。

この円卓会議は2016年度から毎年1回、全部で5回開催する。残りの2回は近現代をテーマとして取り上げる。

また、3か国語に対応したレポートの配布とリレーエッセイのメールマガジン等により、円卓会議参加者のネットワーク化を図る。

□メールマガジンのバックナンバーは下記リンクよりご覧いただけます。

<https://kokushinewsletter.tumblr.com/>

第 63 届 SGRA 论坛（概要）  
第 4 次“日本·中国·韩国国史对话的可能性”圆桌会议

## “东亚”的诞生

### ——19 世纪国际秩序的转变——

日期： 2020 年 1 月 8 日（星期三）～12 日（星期日）

地点： 菲律宾 阿拉邦市 贝尔维尤酒店（The Bellevue Hotel, Alabang）

主办： 渥美国际交流财团关口全球研究会（SGRA）

协办： 科学研究费新领域研究“和解学的创成”、早稻田大学东亚国际关系研究所、  
菲律宾大学 洛斯巴诺斯校（University of the Philippines Los Baños）

#### ■ 论坛主旨

在十九世纪以前，东亚区域内各个国家之间的关系相对疏远，它们各自分别与外国保持着各种各样的联系。但是，当西方将国际化的运动推进到北太平洋的时候，中、日、韩的关系无论在政治、经济还是在通信方面，都变得紧密起来，其中将“东亚”看作是一个整体区域的想象力应运而生。这次会议的主旨就是以东亚国际秩序的这种变化，以及伴随而来的各国国内秩序的变化为主题，展开一场国际性的对话。

当西方国家抱着对商业的极度关心，并以新的交通、通信和军事技术再次出现在东亚这一地区时，中国、日本、朝鲜是如何认识西方世界的？传统的知识体系与此如何融合交错？不管是哪个国家，它们在抵触的同时，也萌生了对新学的憧憬，于是，一方面是对传统的挑战，另一方面是传统的重建，这两种尝试同时进行。如在日本，当洋学成为学校教育的主轴时，将天皇置于秩序的核心、家族中儒家的男子优越观念，也成为一般现象。对于西方的这种抵触和憧憬，各个国家融合交错的方式不同，从而也产生了至今为止不同的文化。

西方的到来，促使各国奋起自卫，其结果是使各个国家演变为“国民国家”。尽管这种演变有早与晚的区别，但却使彼此之间的国境日益明确，也诞生了促使内部团结的民族主义。另一方面，西方带来的海运网，也促使人们走向国境之外。除走向东南亚之外，大量的中国劳工还涌向美洲大陆。以前几乎无人出国的日本，也开始有移民飘洋过海。在朝鲜，移民虽然不多，但却出现了外国留学生和政治亡命之士，并最终对国家的未来给予了很大的影响。民族主义的形成以及跨越国境的移民、留学、亡命等的相互交错，使历来的东亚的秩序在国际关系和国内秩序两个层面都发生了巨大的变化，预示着二十世纪大变动的来临。

本次会议将以上述一系列问题为课题，分三个分科会，对各国国家的情况加以比较、讨论，从而从总体上把握十九世纪东亚地区所发生的大转折。

另外，为了使对话更为顺畅，会议将提供日⇔中、日⇔韩、中⇔韩同声传译服务。圆桌会议的演讲稿也会在 SGRA 报告论集上用 3 种语言刊登，并在 SGRA 的主页上公开。

■会议安排

第一场：开会 主持：李恩民(樱美林大学)				
开会致辞	Cho Kwang	赵 珺	韩国国史编纂委员会	
欢迎辞	Maquito Ferdinand		菲律宾大学洛斯巴诺斯校	19 世纪的菲律宾
基调演讲	Mitani Hiroshi	三谷 博	迹见学园女子大学	“亚洲”的发明
评议人	Song Zhiyong	宋 志勇	南开大学	
第二场：对西方的认识 主持：南基正(首尔大学)				
日本	大久保 健晴	Okubo Takeharu	庆应大学	19 世纪东亚的国际秩序和对“万国公法”的接受吸收——论其在日本的情况
韩国	韩 承勳	Han Seunghoon	高丽大学	19 世纪后半：东亚三国克服不平等条约的可能性与局限
中国	孙 青	Sun Qing	复旦大学	魔灯镜影：18-20 世纪中国早期幻灯的放映、制作与传播
中国	吴 义雄	Wu Yixiong	中山大学	从夷夏到中西：19 世纪前期中国关于西方的论述范式与信息策略
第三场：对传统的挑战和创造 主持：村和明(东京大学)				
日本	大川 真	Okawa Makoto	中央大学	18、19 世纪的女性·女系天皇论
韩国	南 基玄	Nam KiHyun	成均馆大学	日本民法的形成及其在殖民地朝鲜的实施——以制令第七号《朝鲜民事令》为中心——
中国	郭 卫东	Guo Weidong	北京大学	传统与创制：19 世纪后期中国的洋务运动
第四场：跨越国界的人的流动 主持：彭浩(大阪市立大学)				
日本	盐出 浩之	Shiode Hiroyuki	京都大学	东亚公共领域的诞生：19 世纪后半东亚的英文报刊·中文报刊·日文报刊
韩国	韩 成敏	Han Sungmin	大田大学	日本社会对金玉均流亡的认识与应对
中国	秦 方	Qin Fang	首都师范大学	近代中国女性的游移经验与妇女“解放”框架的再思考
<b>2020 年 1 月 10 日 (金)</b>				
<b>第五场 (14 : 00—15 : 30) : 全体讨论 主持人：刘杰 (早稻田大学)</b>				
青山 治世 (亚细亚大学)、平山 升 (九州产业大学)、朴 汉珉 (东国大学)、孙 卫国 (南开大学)				
<b>第六场 (16 : 00—17 : 30) : 全体讨论 主持人：刘杰 (早稻田大学)</b>				
自由讨论				
总结 三谷 博 (迹见学园女子大学)				

□如需查阅会议相关资料，请访问以下网址。

<http://www.aisf.or.jp/sgra/research/kokushi/2019/12468/>

## ■论坛的由来

渥美国际交流财团于 2015 年 7 月举办第 49 届 SGRA（关口全球研究会）论坛，就“东亚的共同财产”“东亚市民社会”的可能性展开了讨论。其中，参会者一致认识到了构建“知识与智慧的共享空间”或叫“知识与智慧的共享平台”的重要性，希求在这一过程中能提供与东亚的和解相链接的智慧。

2016 年 9 月，我们借亚洲未来会议举办之际，设立了国史对话圆桌会议，这就是第 1 次“国史对话的可能性”。迄今为止，中、日、韩三国的国史学者展开了各种各样的学术对话，但在直接影响各国历史认识的国史研究者之间的对话，还有待加深。为此，我们试图通过这一会议探索东亚各国历史对话的可能性。具体而言，我们邀请三谷博先生（东京大学名誉教授）、葛兆光先生（复旦大学教授）、赵珣先生（高丽大学名誉教授）到现场演讲，探讨各国的国史研究者是如何认识与评价东亚的各个历史事件的。

在第 2 次对话中，我们以理解本国史与国际关系之间的有机构造为目的，设定了“蒙古袭来与 13 世纪蒙古帝国的国际化”这一主题。2017 年 8 月，来自中、日、韩、蒙的 11 位国史研究家荟聚北九州，在听取以各国国史为主题的学术报告之后，参会者热烈讨论了朝贡册封、蒙古史与中国史的历史认识以及史料批评等重要话题。纵观第 2 次会议报告，我们认识到，从宏观的角度认识东亚区域的政治动态，不仅可以掌握国际关系的大局，也有助于深入理解各国社会内部的演变。

第 3 次对话，我们把时间点向后推，以“17 世纪的东亚国际关系”为主题。2018 年 8 月，中、日、韩的 9 名国史专家集聚韩国首尔，讨论了日本的丰臣秀吉和满清皇太极前后策动的朝鲜入侵，以及其背后的以银贸易为主流的紧密的经济关系、战乱后的社会安定问题等。此外，为了将以往的三次国史对话与今后联系起来，我们同时举办了由早稻田大学主持的“走向和解的历史学家共同研究网路的探讨”这一分科讨论会。

这种圆桌会议从 2016 年开始，每年举办一次，共 5 次，第 4—5 次将以近现代史为主题。

□如需查阅会议相关资料，请访问以下网址。

<https://kokushinewsletter.tumblr.com/>

SGRA 포럼 개요  
제 4 회 「한국·일본·중국 간 국사들의 대화 가능성」 원탁회의  
「‘동아시아’의 탄생: 19 세기 국제질서의 전환」

일 시 : 2020 년 1 월 8 일 (수)~12 일 (일)

장 소 : 필리핀 알라방시 벨레뷰 호텔, 필리핀 대학 로스 바뇨스 캠퍼스

主 催 : 아쓰미국제교류재단 글로벌 연구회 (SGRA)

共 催 : 과학연구비신영역연구 ‘화해학의 창성’, 와세다대학 동아시아 국제관계연구소, 필리핀대학 로스 바뇨스 캠퍼스

■ 포럼의 취지 :

19 세기 이전의 동아시아는 지역 내 각 나라의 관계가 비교적 밀접하지 않아, 각 나라가 개별적으로 외국과의 관계를 맺고 있었다. 그러나 서양 국가들이 글로벌화의 움직임을 북태평양까지 가지고 오자, 한·중·일은 정치·경제·통신, 모든 면에서 긴밀한 관계를 맺기 시작하였고, 그 과정에서 ‘동아시아’를 하나의 지역으로 간주하는 상상력이 만들어졌다. 이번 회의에서는 동아시아 국제질서의 변화, 그리고 그 과정에서 발생했던 국내질서의 변화를 주제로 대화를 시도하고자 한다.

서양이 상업에 대한 강한 관심과 새로운 교통·통신·군사기술을 지니고 이 지역에 다시 나타났을 때, 조선·중국·일본은 서양을 어떻게 인식했을까. 그리고 이 인식은 전통적인 지(知)의 체계와 어떻게 뒤얽혔던 것일까. 예를 들어 일본에서는 양학(洋學)이 학교 교육의 주축으로 자리잡게 된 한편, 천황을 질서의 핵심에 두고, 가족 내에서는 유교적인 남성우위관이 일반화되었다. 이와 같은 서양에 대한 반발과 동경심의 구성형태는 나라별로 달랐고, 이는 지금까지 이어지는 문화의 차이를 낳게 되었다.

서양의 진출은 각국의 자기 방위를 재촉하였고, 결과적으로 각국을 “국민국가”로 변화시켰다. 속도의 차이는 있었으나, 모두 국경을 명확화하고 내부의 단결을 촉진하는 내셔널리즘을 만들어내게 되었던 것이다. 한편, 서양이 도입한 해운망은 사람들을 국경 밖으로 유인해내기도 하였다. 중국으로부터는 대량의 노동자가 동남아시아와 미대륙으로 향했고, 이전에는 전혀 없었던 일이나 일본에서도 이민자가 바다를 건너게 되었다. 조선의 경우 이민자는 적었으나, 외국 유학생이나 정치적 망명자가 출현하여, 이윽고 나라의 장래에 큰 영향을 미치게 되었다. 내셔널리즘의 형성과 국경을 넘는 이민·유학·망명의 교착은 이후 동아시아의 질서를 국제관계와 국내질서의 두 가지 면에서 큰 변화를 불러왔고, 20 세기의 대변동을 준비하게 되었다.

이번 포럼에서는 위와 같은 문제들을 거론하여, 3 개의 세션으로 나누어 각 국의 사정을 비교하고 토론할 것이며, 이를 통해 19 세기 동아시아 세계에서 일어난 대전환의 전체상을 파악하고자 한다.

또한 원활한 대화를 위해 한국어⇔일본어, 한국어⇔중국어, 일본어⇔중국어 동시통역을 제공할 예정이다. 원탁회의의 강연록은 3 개 국어의 SGRA 레포트로 발행하고, SGRA 홈페이지에도 게재할 계획이다.

■ 프로그램

제 1 세션: 개회 사회: 리 엔민(李 恩民, 오비린대학)				
개회 인사	조광 趙珰	Cho Kwang	국사편찬위원회	
환영 인사	F. 마끼또	Maquito Ferdinand	필리핀대학 로스파뇨스교	19 세기의 필리핀
기조 강연	미타니 히로시 三谷 博	Mitani Hiroshi	아토미학원 여자대학	'아시아'의 발명: 19 세기 리전(region)의 생성
코멘트	송 지용 宋 志勇	Song Zhiyong	남개대학	
제 2 세션: 서양의 인식 사회: 남기정(南基正, 서울대학교)				
일본	오쿠보 다케하루 大久保 健晴	Okubo Takeharu	게이오대학	19 세기 동아시아 국제질서와 『만국공법』의 수용-일본의 경우-
한국	한승훈 韓 承勳	Han Seunghoon	고려대학교	19 세기 후반, 동아시아 3 국의 불평등 조약 극복 가능성과 한계
중국	쑨 칭 孫 青	Sun Qing	북단대학	마등경영(魔灯鏡影): 18 세기~ 20 세기 중국의 매직랜턴 방영(放映)과 제작, 그리고 전파
중국	우 이씨웅 吳 義雄	Wu Yixiong	중산대학	'화하(華夏)와 이적(夷狄)' 에서 '중국과 서양'으로: 19 세기 전기 중국의 서양에 관한 논술 패러다임과 정보전략
제 3 세션: 전통에 대한 도전과 창조 사회: 무라 카즈아키(村 和明, 도쿄대학)				
일본	오카와 마코토 大川 真	Okawa Makoto	츄오대학	18·19 세기의 여성천황·여계(女系)천황론
한국	남기현 南基玄	Nam KiHyun	성균관대학교	일본민법의 형성과 식민지 조선에서의 적용 : 제령 제 7 호 「조선민사령」을 중심으로
중국	꾸어 웨이똥 郭 衛東	Guo Weidong	북경대학	전통과 제도의 창조: 19 세기 후기 중국의 양무운동
제 4 세션: 국경을 넘는 사람들의 이동 사회: 펑 하오(彭 浩, 오사카시립대)				
일본	시오데 히로유키 塩出 浩之	Shiode Hiroyuki	교토대학	동아시아 공공권의 탄생: 19 세기 후반 동아시아에서의 영어 신문·중국어 신문· 일본어 신문
한국	한성민 韓成敏	Han Sungmin	대전대학교	김옥균의 망명에 대한 일본사회의 인식과 대응
중국	친 팡 秦 方	Qin Fang	수도사범대학	근대중국여성의 모빌리티: 경험과 여성 '해방'에 관한 재고
2020年1月10日(金)				
제 5 세션 (14:00-15:30) : 전체토론 사회: 류 지에(劉 傑, 와세다대학)				
아오야마 하루토시(青山治世, 아세아대학), 히라야마 노보루(平山昇, 규슈산업대학), 박한민(朴漢珉, 동국대학교), 쑨 웨이궈(孫衛國, 남개대학)				
제 6 세션 (16:00-17:30) : 전체토론 사회: 류 지에(劉 傑, 와세다대학)				
자유토론				
총괄 미타니 히로시(三谷博, 아토미학원여자대학)				

□ 포럼 자료는 아래의 링크에서 보실 수 있습니다.

<http://www.aisf.or.jp/sgra/research/kokushi/2019/12468/>

■ 프로그램의 경위 :

아즈미 국제교류재단은 2015년 7월, 제 49회 SGRA(세키구지 글로벌 연구회) 포럼을 개최하면서 “동아시아의 공공재” 및 “동아시아 시민사회”의 가능성에 대해 논의했다. 그 과정에서 우선 동아시아에 “知的 공유공간” 혹은 “知的 플랫폼”을 만들고, 이로부터 화해로 이어지는 지혜를 만들어 동아시아에 공급하는 것의 의의를 확인했다.

이 플랫폼에 「국사들의 대화」 코너를 설치한 것은 2016년 9월의 아시아 미래회의를 기회로 개최된 제 1회 「국사들의 대화」였다. 지금까지 3개국의 연구자들 사이에서는 많은 대화가 이루어졌지만, 각국의 역사인식을 좌우하는 “국사연구자”들이 함께하는 대화는 심화되지 않았다는 인식에서, 우선 동아시아의 역사대화를 가능케 하는 조건을 찾기로 했다. 구체적으로는 미타니 히로시 교수(동경대학 명예교수), 거자오광 교수(복단대학 교수), 조광 교수(고려대학교 명예교수)의 강연을 통해, 세 나라의 여러 “국사” 연구에서 동아시아의 사건을 어떻게 다루고 있는지 검토했다.

제 2회 대화에서는 자국사와 국제관계를 보다 구조적으로 이해하기 위해 「몽고침략과 13세기 몽골제국의 글로벌화」라는 테마를 설정했다. 2017년 8월, 한국·일본·중국·몽골 등에서 11명의 국사연구자가 기타큐슈에 모여, 각국 국사의 시점에서 연구발표를 행한 후, 동아시아 역사라는 시점에서 조공책봉의 문제, 몽골사와 중국사의 문제, 사료를 다루는 방법 등에 대해 활발한 논의가 행해졌다. 이 회의에서 발표된 연구는, 동아시아 전체의 움직임에 주목한다면 국제관계 뿐만 아니라 개개의 나라와 사회를 보다 깊이 이해하는 수단이 될 수 있다는 사실을 분명하게 해주었다.

제 3회 대화에서는 「17세기 동아시아의 국제관계」를 주제로 설정했다. 2018년 8월, 한국·일본·중국에서 9명의 국사연구자가 서울에서 모여 일본의 도요토미 히데요시와 만주의 홍타이지에 의한 조선침공과 그 배경에 있는 은 무역을 주축으로 하는 긴밀한 경제관계, 전란 후의 안정에 대해 검토했다. 또한 3차례의 국사 대화를 되돌아보면서 다음 단계로 이어가기 위해, 와세다대학이 주관하는 「화해를 향한 역사가 공동연구 네트워크의 검증」이라는 패널 토론이 개최되었다.

본 원탁회의는 2016년부터 매년 1회, 총 5회 개최될 예정이다. 남은 2회는 근현대사를 테마로 삼을 계획이다. 또한 3개 국어로 만들어진 레포트 발간 및 배포, 연속 에세이 매거진 발간 등을 통해, 원탁회의 참가자 간의 네트워크를 만들 예정이다.

□ 메일 매거진 백넘버는 아래의 링크에서 보실 수 있습니다.

<https://kokushinewsletter.tumblr.com/>